



高知県スクールカウンセラーガイドブック

(改訂版)

令和5年4月

高 知 県 教 育 委 員 会

はじめに

スクールカウンセラーの学校派遣は平成7年度に調査研究事業として始まり、平成13年度からは国の補助事業として位置づけられ、生徒指導上の課題解決、不登校等への支援を目的として、スクールカウンセラーの配置が拡充されてきました。高知県教育委員会でも、平成15年3月に学校や教育委員会がスクールカウンセラーを効果的に活用するためのスクールカウンセラーガイドブックを作成し、スクールカウンセラーの活用を図ってきました。さらに、児童生徒や学校の多様なニーズに対応するために、平成28年度からは、県内全ての公立学校にスクールカウンセラーを配置してきました。

しかし、その後も、子どもたちを取り巻く環境は大きく変化してきており、いじめ、不登校、児童虐待の増加やヤングケアラーなどの多岐に渡る課題への対応が求められるようになっていきます。そのことに伴い、子どもや学校教育に関連する法令なども次々と整備されてきました。昨年改訂された生徒指導提要では、課題解決型の対応に加え、子どもの発達を支えることや課題予防的な未然防止の生徒指導の重要性が明記されました。

そのため、心理の専門職であるスクールカウンセラーに求められる役割も変化しており、学校もスクールカウンセラーをより効果的に活用し、様々な課題を抱える子どもたちへの対応だけでなく、すべての子どもに対する予防的な取組も求められるようになりました。

このような背景から、スクールカウンセラー活用のための新たな指針を示すことを目的に、スクールカウンセラースーパーバイザー4名の皆様方にもご協力をいただき、ガイドブックの改訂をすすめてきました。

当ガイドブックは、相談支援体制を充実させるための環境づくりやスクールカウンセラーコーディネーターの役割、スクールカウンセラーの役割を理解するための基本姿勢や基本業務等を掲載しており、学校や教育委員会はもちろんのこと、スクールカウンセラーにも参考にしていただきたい内容となっています。

当ガイドブックが活用され、スクールカウンセラーの活動が、子どもたちの健やかに成長に寄与できることを願っています。

高知県教育委員会事務局
人権教育・児童生徒課長

高知県スクールカウンセラーガイドブック（改訂版）目次

≪ 総 論 ≫

I 学校及び市町村（学校組合）教育委員会の基本姿勢

- (1) 学校の基本姿勢 1
- (2) 市町村（学校組合）教育委員会の基本姿勢 2

II SCの基本姿勢

- (1) 心理職としての姿勢 2
- (2) SCとしての姿勢 2
- (3) 専門性を高めるための自己研鑽の継続 3

III 倫理事項

- (1) 守秘義務 4
- (2) 倫理の遵守 4

IV SCの基本スキル

- (1) 聴く／対応スキル 5
- (2) 関係調整するスキル 5
- (3) 情報を収集／共有するスキル 5
- (4) 助言／援助スキル 5
- (5) 記録するスキル 5

≪ 各 論 ≫

I 学校や教育委員会における支援体制

- (1) 相談体制 6
 - ① SCの役割の共通理解 6
 - ② SCコーディネーターの位置づけと役割 7
 - ③ 環境づくり 9
 - ④ 児童生徒・保護者への周知 10
 - ⑤ 教職員としての位置づけ・校内での連携 11
 - ⑥ 校種間・校外との連携 11
- (2) 学校への緊急支援に関する制度 12
 - ① SCの緊急派遣 12
 - ② 緊急学校支援チームの派遣 13
 - ③ SCの集中派遣 13

*** SCと適切な協働をするためのチェックリスト *** 14

Ⅱ SCの基本業務

(1) 予防・未然防止／早期発見	15
① 児童生徒、学級、学校のアセスメント	15
② 児童生徒、教職員とのラポール形成	15
③ 校内での連携(情報共有)	15
④ 関係機関との連携	18
⑤ 教職員への研修	20
⑥ 児童生徒への心理教育	20
(2) 対応	21
① 児童生徒、学級、学校のアセスメント〈再掲〉	15
② 児童生徒のカウンセリング	21
③ 保護者への助言・援助	22
④ 教職員へのコンサルテーション	23
⑤ 校内での連携(情報共有)〈再掲〉	15
⑥ 校内支援会への参加	24
⑦ スーパーバイズ	25
(3) 緊急対応	26

★ トピックス ★

スクールカウンセラーを学校に配置するねらい	1
”スクール”カウンセラーの専門性とは？	3
スクールカウンセラーの守秘義務	4
スクールカウンセラーの配置形態	8
教育支援センター配置アウトリーチ型スクールカウンセラー	12
スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの視点と連携	16
スクールカウンセラーと心の教育センターとの連携と協働	19
スクールカウンセラーが実施する校内研修	20
カウンセリングにおけるスクールカウンセラーの視点	22
オンラインカウンセリング	23
コンサルテーションとは	24
校内支援会とは？	25
スクールカウンセラーの勤務例(1日の流れ)	25
校種等による勤務の留意点	26
災害発生時のスクールカウンセラーの勤務態勢	27

＊ 今後、スクールカウンセラーの業務遂行にかかる留意点や事案別対応等について、順次執筆する予定です。

総論Ⅰ 学校及び市町村(学校組合)教育委員会の基本姿勢

(1) 学校の基本姿勢

不登校やいじめ、虐待、非行などといった困難な状況に直面している子どもの背景には、多くの場合、心理的背景(要因)とともに、家庭、友人関係、地域、学校など、子どもたちのおかれている社会的背景(要因)があります。そして、それらが複雑に絡み合っていることから、表出する行動のみに着目する対応や、一部の教職員による対応から、より幅広い解決策を見いだす試みをしようとする姿勢が重要になります。

組織的な支援をより効果的に行うためには、教職員、スクールカウンセラー(以下、SC)、スクールソーシャルワーカー(以下、SSW)が互いの専門性を理解し、協働することが重要です。本ガイドブックでは、SCの業務や、SCを活用するための学校等の体制づくりについて述べています。教職員の共通理解の際などにご活用ください。

学校が、常勤ではないSCと効果的に連携を進めるためには、協働できる関係性をどのように構築していくかがポイントになります。各論Ⅰで詳しく述べていますので、併せてご覧ください。

SCを活用する主体は「学校」です。活用の目的を明確にし、以下の項目を参考にしながら、年度当初にSCと学校の間で十分な打ち合わせを行いましょう。

学校の相談支援体制づくりのポイント

※詳しくは各論Ⅰ参照

- ① 学校の状況把握
- ② 具体的な課題設定
- ③ 職務内容の確認
- ④ 相談支援体制の確認

学校教育活動の主な場面は、授業や行事などの「集団指導」です。集団の中の子どもの様子を心理や福祉の視点から捉え、支援にいかすことも効果的です。

学校の状況を踏まえて、SCやSSWと連携した未然防止策やその運用を検討することも、相談支援体制づくりのポイントです。



★トピックス★ スクールカウンセラーを学校に配置するねらい

複雑化、多様化する社会の中であって、児童生徒が抱える課題も多種多様です。学校では、いじめや暴力行為等の問題行動、不登校等について、事案直後の対応のみではなく、事案の改善、再発防止までを見据え、取り組むことが求められています。

SCは心理の専門家として、教育の専門家である教員や福祉の専門家であるSSW等と共に学校で活動しています。活動の中でSCは、児童生徒、保護者、教職員に対し、心理的見地からカウンセリングやアセスメント、コンサルテーション等を行うことが求められています。

また、学校全体の支援力を向上させるために、教員へのカウンセリングマインドに関する研修や児童生徒へのストレスマネジメント等に関する心理教育などを実施することも望まれています。

さらに、学校全体をアセスメントし、相談支援体制の改善充実を他職種と協働して推進していくことが重要とされています。

(2) 市町村(学校組合)教育委員会の基本姿勢

学校の相談支援体制を充実していくうえで、「児童生徒や保護者等が相談しやすい環境」をつくることは重要です。そのためにも、市町村(学校組合)教育委員会が各学校の相談環境等を確認し、必要に応じてサポートしていただくことが不可欠です。また併せて、「校種間における支援の連携」などについて、既存の会議等を活用して機会を設けるなど、教育委員会が主体となり、働きかけることによって、スムーズに連携が進む場合もあると考えます。

市町村(学校組合)教育委員会は、学校や教育支援センター等とSC・SSWとが良好な関係を築き、効果的に活用がされているか等、適切に状況を把握し、課題が生じている場合は県教育委員会と連携を図りながら、その解決に向けて主体的に対応することが大切です。

総論Ⅱ SCの基本姿勢

SCは、児童生徒等の個別相談活動だけでなく、学校コミュニティ等を理解し、活動することが必要です。そのため、心理専門職としての姿勢とともに、学校組織の一員であることを常に意識し、教職員と協働していくことが求められます。

(1) 心理職としての姿勢

① 心理の専門性

SCは心理学や臨床心理学に基づく高い専門性を有する必要があります。これは、単に科学的な知識を持つことにとどまらず、実践をふまえた深い人間理解の方法を身につけ、高い倫理性を有し、相談者のために誠実にかつ柔軟に取り組む姿勢を有するということです。

② 十分な内省に基づく心理教育的実践

SCは「心を理解すること」は極めて難しいことを自覚し、多面的な視点を持ち、常に相談者の自己決定を大切にするとともに、自らの気づきにも丁寧に寄り添い、それらを深く内省する姿勢を自ら真摯に求めていく必要があります。

③ 多様性をふまえた自己決定の尊重

SCは、相談者がさまざまな心情や価値観、多様性を有していることを尊重し、相談者が自らの心情を大切にしながら自己決定することをサポートしていきます。また、学校関係者や保護者も多様な価値観を有していることを踏まえ、関係者への支援を行うことが大切です。

(2) SCとしての姿勢

① 相談者や関係者との信頼関係の構築

相談者や関係者と信頼関係を作ることの大切さ、難しさを自覚し、信頼関係を作るための様々な関わり方を身に付けておく必要があります。特に、学校外の関係者と信頼関係を構築するため

には、ＳＣの能動的な関わりが望まれます。また、ＳＣの関わりが相手にどのような影響を与えているかを詳細に観察し、信頼関係をどう作るかの内省を大切にしていきます。

② 関係法規、制度も含めた学校コミュニティとの協働

学校は、様々な法律や制度に基づいて教育活動が行われており、それらの中で多様な人々が参加しているコミュニティであることを踏まえ、そのコミュニティの機能とＳＣの役割を的確に把握しながら活動を行うことが重要になります。

(3) 専門性を高めるための自己研鑽の継続

上記の基本的な姿勢を保ちつつ高めていくために、ＳＣ自らの絶えまない自己研鑽が重要であると同時に、自らの力を率直に観察し、どのような自己研鑽が必要なのか、整理する力がＳＣには必要となります。

★トピックス★ “スクール”カウンセラーの専門性とは？

心理職であるＳＣが勤務するにあたって、(1)臨床心理学の視点から考えると、①面接力やアセスメント力、②心理職としての中立性・守秘義務を常に意識する力が求められます。

そして、(2)“スクール”カウンセラーの視点、つまりＳＣが学校で働いていくための視点から考えると、児童生徒が安心して相談できるような関係を形成する力、児童生徒と先生方との架け橋的な役割などを担っていく力、教職員との関係を形成していく力が非常に大切となるでしょう。更に、未然防止を図る力、緊急性を見極めて教員との連携・協働を行っていく力も現場でのＳＣには要求されます。

例えば、学校でＳＣが基本的に“待ち”の姿勢になってしまっている場合や、ＳＣ自身が相談業務を抱え込みすぎてしまっている場合などは、再度ＳＣ自身が“スクールカウンセラーの役割や立ち位置”などについて、見つめ直す必要が出てきます。

ＳＣは、相談者の思いや考えをしっかりと聴き、指示的にならないように留意しながら、相談者の気持ちの安定や困っていることなどの改善に繋がるよう一緒に考えていきます。またＳＣは、学校全体を見立て、よりよい相談支援体制となるよう調整する役割も担っています。

それだけではなく、ＳＣ自身も自分の活動を客観的に捉える力も必要となります。ＳＣは、これらの専門力を発揮するためにも、日頃から自分の体調管理や感情の整理・調整に努め、自分の心の安定を図ることも大切です。

心理職が勤務する領域として、医療・福祉など様々ありますが、教育領域、つまり学校現場においては、上記のスキルを意識して発揮していくことが、“スクール”カウンセラーの専門性と言えるでしょう。



総論Ⅲ 倫理事項

相談者等の信頼を失墜させないように、倫理事項の遵守は必須です。一方で、ケースによっては相談者等の心身や人権を守るために、組織として倫理事項の扱いについて判断を求められる場合もあります。

(1) 守秘義務

心理職としての守秘義務と併せ、学校組織の一員として集団守秘の考えも踏まえ、活動することが望まれます。SCは、相談者の同意を前提として関係する教職員との間で情報を共有し、その教職員とともに適切な支援を行う必要があります。特に児童生徒の生命に関わる事項で、学校内外での速やかな連携が必要なケースについては、集団守秘の考えのもと、当該児童生徒等に関係する教職員や関係機関で情報共有し、支援方法の検討を行うなど、慎重かつ柔軟な判断が求められます。

(2) 倫理の遵守

学校内で唯一の心理職であるが故に、自己判断を避け、専門職業人同士で各自の倫理事項や判断基準を確認し合う行動が求められます。そのためにも、心理関係のみならず、幅広い職種の研修会等へ主体的・能動的に参加し、自身の倫理観を確認する機会を持つことが必要です。

★トピックス★ スクールカウンセラーの守秘義務

相談者が安心して相談できるように心理の有資格者には、職業として「秘密を守ること」が義務づけられています。



<公認心理師法>

第41条（秘密保持義務）

公認心理師は正当な理由がなくその業務に関して知り得た人の秘密を漏らしてはならない。公認心理師でなくなった後においても同様とする

<臨床心理士倫理綱領>

第3条（秘密保持）

臨床業務従事中に知り得た事項に関しては、専門家としての判断のもとに必要と認めた以外の内容を他に漏らしてはならない。また事例や研究の公表に際して特定個人の資料を用いる場合には、来談者の秘密を保護する責任をもたなくてはならない。

※ 資格を有していないSCにも同様の責務を求めています。

一方で、児童生徒の生命に関わる事項で、学校内外での速やかな連携が必要なケースなどについては、相談者の了解が得られなくても共有することがあります。

<秘密保持の例外状況>

- ① 自傷・他害の恐れがある場合
- ② 法律上理由がある場合（児童虐待防止法、医療法、刑事訴訟法など）
- ③ 相談者の支援にかかわる他の専門職と連携する場合（医師や保健師など。教員も専門職）

よって、SCの守秘義務について事前に校内で共有しておくとともに、管理職や関係教職員と、チーム内での守秘義務の考え方も含めて、どのような情報をどのような形で共有するかといったことについて話し合い方向性を決めておくことが大切です。

総論Ⅳ SCの基本スキル

SCの基本業務（各論Ⅱ参照）は多岐にわたるため、従来の個別カウンセリングスキルやアセスメントスキルのほか、SCとして活動を遂行するためのさまざまなスキルが必要とされます。

（1）聴く／対応スキル

相談者がその場におられることをねぎらい、さらには気持ちや思いに寄り添いつつ、同時に客観的な視点も維持しながら聴くスキルが求められます。応答においては相談者が理解できる表現を使用するとともに、相談者へのいたわりの思いが大切です。



（2）関係調整するスキル

SCは心理職の立場として学校で活動していますが、学校がより良い支援体制となるよう援助を行うスキルも必要となります。例えば、校内支援会が円滑に進行できるように、教員やスクールソーシャルワーカー等の専門性を踏まえ意見を整理するなど、校内支援会を運営する担当教員を援助することが挙げられます。

（3）情報を収集／共有するスキル

教職員や保護者からの情報収集のほか、校内巡回や授業観察等の機会を通して学校の状況に配慮しつつ、主体的・能動的に活動し、児童生徒等の情報を収集し、教職員と共有するスキルが求められます。

（4）助言／援助スキル

保護者や教職員から児童生徒への対応等に関する相談を受けた場合、SCは相談の内容から適切にアセスメントし、その結果に基づいた対応策を具体的にいくつか構築した上で、相談者が理解できる表現で助言するスキルが必要となります。

（5）記録するスキル

SCの実施したカウンセリング記録は公的な記録となります。誤字・脱字や表現に十分な注意が必要です。また、記録する内容は、個人情報保護への配慮とともに、心理職としての守秘義務と学校組織の一員としての守秘義務のバランスを考慮して記録するスキルが必要となります。

各論Ⅰ 学校や教育委員会における支援体制

(Ⅰ) 相談体制

① SCの役割の共通理解

SCの基本業務としては、

- ・ 児童生徒へのカウンセリング
- ・ 教職員へのコンサルテーション
- ・ 保護者への助言・援助
- ・ 児童生徒、学級、学校のアセスメント
- ・ 校内での連携（情報共有）
- ・ 関係機関との連携
- ・ 教職員への研修
- ・ 児童生徒への心理教育

等があります。学校のニーズを明確にSCに伝えることによって効果的な活用につながります。そのためにも、以下の項目を参考にして、年度当初にSCと学校の間で十分な打ち合わせを行いましょう。

学校の体制づくりのポイント

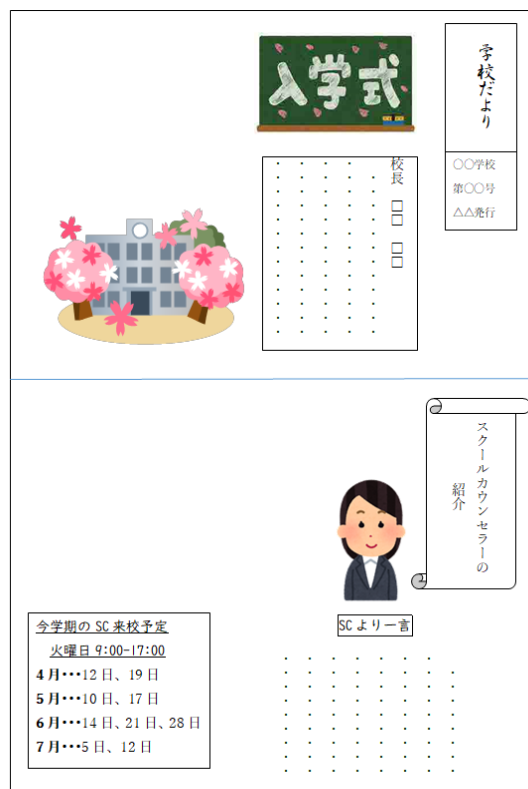
- ・ **学校の状況把握**（学校規模、教職員及び児童生徒の様子、学校と家庭・地域との関わりなど）
学校の教育相談機能を高めるために、学校の状況を具体的に伝え、どのような形でSCに活動してもらうのか、学校としての方向性を整理しておくようにしましょう。
- ・ **具体的な課題設定**（教職員・児童生徒・保護者・地域のニーズ）
学校等のニーズとSCの専門性（専門領域や得意分野）によって、どのような協働の在り方があるのかを検討し、共通理解を図るようにしましょう。
- ・ **職務内容の確認**（職務内容、組織上の位置づけなど）
教職員やSCが、それぞれの専門性や役割などを理解し、適切に役割分担を行うことで、効果的な支援ができると考えます。
また、学校教育活動の主な場面は、授業や行事などの「集団指導」です。個別のカウンセリングをはじめ、SCによる校内巡回や授業観察を通して専門的な助言をもらい、集団指導にいかすことも効果的であると考えます。
- ・ **教育相談体制の確認**（コーディネーター、養護教諭などとの役割分担）
SCやSSWは「チーム学校」の一員です。校内組織に位置づけ、定期的に開催される校内支援会等に参加できるよう、年間計画を示すことなども大切です。
教職員の役割分担と併せて、位置づけや協働する内容等、定期的に教職員全員で共通理解を図ることで、一部の支援者に過重な負担がかかることも防ぐことができると考えます。

② SCコーディネーターの位置づけと役割

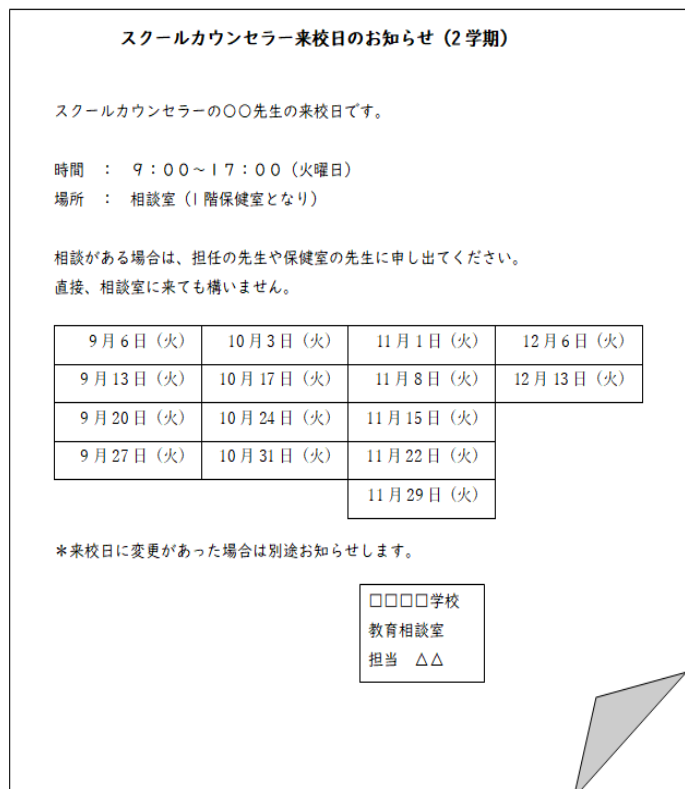
SC活用のために学校内での担当者としてSCコーディネーターを決めてください。SCコーディネーターの主な役割として次のことが挙げられます。

・ 来校日年間計画の作成と配布

年度当初に計画を立て、教職員への予定表配付、児童生徒への教室掲示、保護者への学校便りの配付などを行い、教職員、児童生徒、保護者へ広く周知してください。相談者にとって、SCの来校日が事前に分かることは、安心して相談できる環境づくりにつながります。また、年間計画や活動内容を定期的に振り返ることで、SCの時機に応じた効果的な活用につながります。



(図) 学校新聞の例



(図) SC来校計画表の例

・ 相談予約の受付・スケジュールの調整

SCが効果的に活動できるよう、1日のスケジュールを立ててSCに伝えましょう。

児童生徒、保護者や教職員などから相談の希望があった場合には、SCコーディネーターが窓口として予約を調整します。面談の時間枠は1時間程度とします。

相談者は、緊張や迷いを感じながら相談を希望することも少なくはありません。相談者のプライバシーに配慮するなどSCコーディネーターのさまざまな気遣いが、相談者の安心につながることにより留意し、対応するようにしましょう。

・ 校内外での連携

SCに家庭訪問の同行を求める場合は、事前に学校が保護者に了解を取ってください。また、関係機関との連携が必要になった場合は、SCコーディネーターが管理職へ相談し連携を図るようにすることで、学校、SC、関係機関の円滑な連携につながります。

・ 会議、研修会でのＳＣ活用の調整

校内支援会、チーム会、いじめ対策委員など気になる児童生徒の支援会議への出席を調整してください。また、教職員のカウンセリング力向上のための研修講師を依頼することも可能です。日頃の交流を活かし、予防的、協働的な支援の連携につながりやすくなります。

・ ＳＣ便りの発行

学校便りへの寄稿や、ＳＣ便りの発行など、ＳＣの活動を情報発信できる場を提供しましょう。時期や季節や学校の実態に合わせた話題を取り入れることで、予防効果が期待できます。

・ ＳＣへの情報提供

カウンセリングや校内支援会に向けて、積極的にＳＣへ情報提供してください。学校生活アンケートやいじめアンケートなどから、ＳＣが児童生徒の傾向や学校のニーズを捉えることに役に立ちます。なお、ＳＣが勤務の都合上、校内支援会等に参加できない場合、ＳＣから事前に意見を聴いたり、事後に報告したりするなどし、協議内容を共有するようお願いします。

年度当初にＳＣへ渡してもらいたいもの

- | | |
|--------------------|------------------|
| ・ 学校要覧 | ・ 行事予定表 |
| ・ 名簿（学級担任、職員、児童生徒） | ・ 座席表（児童生徒、教職員）※ |
| ・ 部活動担当者 | ・ 学校便り※ |
| ・ 学級便り※ | ・ 給食献立表※ |

＊ 上記のものがあれば、ＳＣの活動に役立ちます。

＊ 「※」は、年度当初だけでなく、新しい物が作成されたら共有しましょう。

前回の勤務日から今日までの、学校や子どもの様子はどうだろう？

子どもの名前が分かったら、お話ししやすいな。

こんな情報があると勤務しやすいな



★トピックス★ スクールカウンセラーの配置形態

ＳＣの配置形態は数種類あります。主な配置形態は以下の通りです。

- ・ 一校配置 …一校に一人のＳＣを配置
- ・ 複数校配置 … 複数校に一人のＳＣを配置
- ・ 教育支援センター配置
 - … 教育支援センターにＳＣを配置
 - … 教育支援センターを拠点とし、複数校にＳＣを配置

配置形態によっては、ＳＣの勤務が月に１日程度になる学校もあります。限られた勤務時間でＳＣが効果的に活動できるよう、ＳＣコーディネーター担当教員は、ＳＣと協働のもとカウンセリングや校内支援会等のスケジュールリングをしっかりと行いましょう。

また、ＳＣには学校の支援ニーズや共有すべき情報を伝え、アセスメント結果や支援に関する助言を求めるようにしましょう。ＳＣも学校のニーズに応えることができるよう、活動の仕方の工夫が求められます。

③ 環境づくり

相談者の秘密が守られ、安心して話ができる環境を整えてください。

ア 相談室の位置

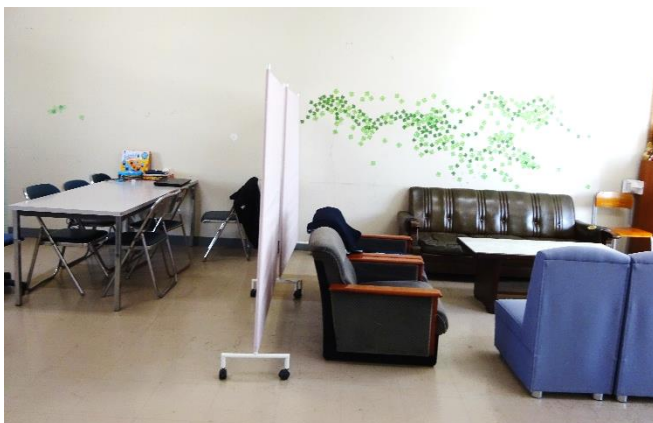
- ・ 相談室への入室を見られたくない相談者へ配慮する。
- ・ 教室や職員室に近すぎたり、児童生徒の生活圏から離れすぎたりしない場所を選ぶ。
- ・ 可能ならば、入り口は教職員と児童生徒、保護者とで分ける。

イ 個室の設置

- ・ 音漏れやプライバシーへの配慮をした個室を準備する。
- ・ 個室ではない場合は、パーテーションや棚を置いて区切る。
- ・ ＳＣが来校しない日は、教職員が児童生徒、保護者と相談を行う部屋としても使えるよう、整備しておく。

ウ 部屋のレイアウト

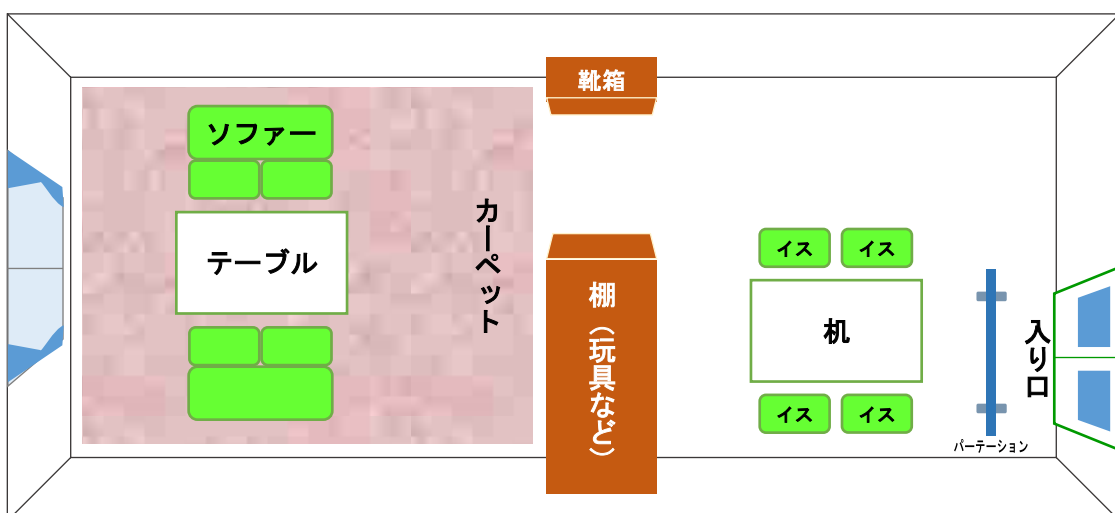
- ・ 落ち着いた雰囲気、控えめなデザインの家具や椅子を使用する。
- ・ 学校にある机(学習机や事務机など)や椅子を使用する場合は、テーブルクロスを敷くなど、場の雰囲気に合わせて装飾する。
- ・ ガラス窓にはカーテンを設置する。



(図)工夫した部屋の例



(図)温かみのある家具の配置例



エ 相談室内環境

- ・ エアコン等により室温を調節する。
- ・ その他に必要な備品を揃える。

例：時計、ティッシュペーパー、
心に関する本、動物の写真集や絵本、
パズルやゲーム類 など

自分の言葉で上手く表現できない子どもさんに、遊びを通して面接をする『プレイセラピー』という方法があります。トランプやゲームは、子どもの自然な気持ちを引き出すための大切な小道具になるのです。



オ SCの机の配置

職員室や教育相談室などに、できるだけSC専用の机をご準備ください。先生方と交流できる場所に机があると、日ごろから相談しやすい雰囲気づくりの一助となります。

④ 児童生徒・保護者への周知

児童生徒や保護者に向けてSCの活用を促すために、以下の方法を参考に、様々な機会にSCを紹介するとよいでしょう。年度初めの早い段階でSCの存在を児童生徒や保護者に知ってもらうことは、相談へのハードルを下げ、今後の支援につながりやすくなります。

《周知の方法例》

- | | |
|---------|--------------------|
| ・ 学年集会 | ・ 全校集会 |
| ・ 学校便り | ・ 学校ホームページ |
| ・ SC便り | ・ 学級担任による勧め |
| ・ PTA総会 | ・ 学級（学年）懇談会 |
| ・ 校内放送 | ・ SC来校予定が分かる掲示物 など |

【こんなことから気軽に相談を】

スクールカウンセラーさんとの面談を勧めても、子どもたちや保護者さんが受けてくれないんです。

教員



そうなんです！それはお困りでしょう？
SCに子どもさんや保護者さんをつないでくださる思い嬉しいです。日ごろあまり知らないSCに相談するようにと勧められても子どもさんや保護者さんはどうしていいか戸惑っているのでしょうか？

SC



「私（先生）たちもちょっと困ったことがあるとSCさんに相談してるんですよ。相談内容は他の人に漏れないようにしてくれているので、とっても助かってます。安心して話せると思うので、あなた（〇〇さん）もよかったらどうかなあ（どうでしょうか）！」そんな風に伝えてみるのも一つの方法かもしれません。

相談ニーズの有無に関わらず、SCとの全員面接を定期的に行っている学校もあります。子どもたちにとって、「こういうことも相談していいんだ。」と知る機会になるとともに、小さなサインに早期段階で気づくこともできます。相談しやすい環境づくりの工夫として効果的です。

⑤ 教職員としての位置づけ・校内での連携

ＳＣを校内組織・分掌、例えば教育相談部会やいじめ対策委員会等の一員として位置付け、生徒指導や教育相談に関わる会議に出席を要請し、助言及び援助を受けられる体制を作ることが大切です。また、校内支援会にも参加をしてもらうことで、心理的な視点から子どもたちの見立てをもらい、手立てを共に考えることができます。

ＳＣやＳＳＷの仕事内容やどのようなことができるのかを校内研修等を通し、教職員間で共有しておくことも、活用のしやすさに繋がります。また、ＳＣやＳＳＷは断片的に学校や子どもの状況を把握する場合が多く、毎日子どもたちの様子を把握している教職員（特に養護教諭）との連携は何よりも大切な要素です。職員室内にＳＣの机があると、ＳＣからも教職員からも、どちらからも話しかけやすくなり情報共有する時間が確保しやすくなります。

⑥ 校種間・校外との連携

校種をこえて切れ目のない支援を行うためには、計画的に段階を踏んで引き継ぎを行う必要があります。児童生徒の様子や家庭状況はもちろん、これまで行ってきた支援方法を含めた引き継ぎを、ＳＣやＳＳＷも交えて行うことが大切です。併せて、ＳＣ間での引き継ぎもしていきましょう。

また、子どもたちへのよりよい支援ができるように、関係機関と日ごろから接点をもち、速やかな連携がとれるようなネットワークをつくり、協力体制を構築しておく必要があります。連携を図るかどうかは個々の判断ではなく、学校組織として学校長判断の下に行われます。

連携を図る際には、子どもやその保護者になぜ連携が必要なのかをよく説明し、了解を得る必要があります。子どもやその保護者が安心して利用できるようにするため、以下のようなことに配慮しなければなりません。

- ・ 連携機関がどういうところかを明確に説明するとともに学校もその機関や人と一緒に対応を考え、連携して支援していくことなどを伝えること
- ・ 学校から他機関への情報提供の仕方について、どの程度の情報をどういう方法で伝えるか、子どもとその保護者の意向を踏まえて対応すること

【 連携が考えられる社会資源の例 】

教育研究所、教育支援センター、保健所、精神保健福祉センター、療育福祉センター、医療機関、児童相談所、子ども家庭支援センター、少年サポートセンター、少年補導育成センター、心の教育センターなど

医療機関には適切な情報提供書を提供する場合があります。



★トピックス★ 教育支援センター配置アウトリーチ型スクールカウンセラー

アウトリーチ型ＳＣ（以下、ＯＲＳＣ）は市町村の教育支援センターに配置されており、当該市町村立学校に在籍している、主に不登校や不登校傾向にある児童生徒とその保護者を対象に、心理的支援を行っています。具体的な活動は、教育支援センター内でのカウンセリング、在籍校の依頼による家庭訪問、在籍校で行われる個別支援会での助言などです。また、対象の児童生徒が在籍する学校のＳＣと協働し、児童生徒と保護者それぞれの面談を担当するなど、役割分担をして支援にあたるケースもあります。ＯＲＳＣはそれぞれの教育支援センターの活動方針に沿って、様々な支援活動を展開しています。

ＯＲＳＣは、学校や教育支援センターにおける支援が円滑に行われるように、ＯＲＳＣが関わっている児童生徒のアセスメントや支援方針について、在籍校勤務のＳＣと情報共有を行うなど、連携を取って支援していくことが大変重要です。また、ケース会や研修会などの機会を通し、教育支援センターの職員が児童生徒理解を促進できるように働きかけることも、児童生徒を支援する活動の一環です。

《教育支援センターアウトリーチ型ＳＣの一日の活動例》

時間	アウトリーチ型ＳＣの活動
９：００～１１：００	支援員との打合せ、通所生の活動見守り
１１：００～１２：００	通所生保護者のカウンセリング
１２：００～１３：００	通所生と昼食、昼休み
１３：００～１４：００	A中学校Bさん宅へ家庭訪問（移動時間含）
１４：００～１５：３０	A中学校へ移動し、Bさんの支援会参加
１５：３０～１６：００	記録等、事務作業
１６：００～１７：００	職員と情報共有

（２）学校への緊急支援に関する制度

① SCの緊急派遣

いじめや虐待、児童生徒の生命に関わる事案等が発生し、児童生徒への緊急的な支援が必要になった場合に、ＳＣや心の教育センターＳＣが学校に派遣される制度があります。

緊急派遣が必要になった際は、学校長より所轄の教育委員会を通して、人権教育・児童生徒課に要請します。人権教育・児童生徒課は、事案の内容に応じてＳＣまたは心の教育センターＳＣの派遣を行います。

緊急派遣されたＳＣは、学校の支援方針に従い、当該児童生徒への個別面談やケース会への参加等を行います。派遣期間は事案によって異なりますが、概ね１日～数日程度です。

② 緊急学校支援チームの派遣

児童生徒の生命に関わる事案等が発生し、学校機能が低下している場合に、学校支援を目的に、スーパーバイザーやＳＣを含む複数の専門職で構成された緊急学校支援チームが当該校に派遣される制度があります。

派遣要請は、学校長より所轄の教育委員会を通して人権教育・児童生徒課に行います。人権教育・児童生徒課は、事案や学校の状況に応じて、必要な人員を派遣します。

緊急学校支援チームは、児童生徒が再び安心・安全な学校生活を送ることができるよう、学校組織の機能回復のためのマネジメントや、教職員や当該校勤務のＳＣ、ＳＳＷとともに、二次被害予防のための支援計画に関する援助を行います。派遣期間は事案によって異なりますが、概ね数日～１週間程度です。

③ ＳＣの集中派遣

児童生徒への支援を集中的に実施する必要がある場合に、当該校勤務のＳＣが週あたりの勤務日数より多く学校に派遣される制度があります。

派遣要請は、学校長より所轄の教育委員会を通して、人権教育・児童生徒課に行います。人権教育・児童生徒課は集中支援の必要性を判断し、ＳＣの派遣を行います。

集中派遣されたＳＣは、学校の支援方針に従い、当該児童生徒への個別面談やケース会への参加等を行います。派遣期間は事案によって異なりますが、概ね１日～数日程度です。

なお、当該校勤務のＳＣが集中派遣により勤務した日数は年間勤務日数に含まれますので、後々の勤務日の調整が必要です。

表：緊急支援体制

	ＳＣの緊急派遣	緊急学校支援チーム派遣	ＳＣの集中派遣
派遣申請	学校長 ⇒ 所轄の教育委員会 ⇒ 県教育委員会事務局 人権教育・児童生徒課		
派遣目的	児童生徒への緊急的な支援	組織的機能が低下した学校への緊急的支援	児童生徒への集中的な支援
派遣人員	・ ＳＣ ・ 心の教育センターＳＣ 等	・ 人権教育・児童生徒課 ・ 心の教育センター ・ ＳＣスーパーバイザー等 複数の専門職	・ ＳＣ
主な支援対象	・ 集団 ・ 個人	・ 学校組織・集団・個人	・ 主に個人
主な支援内容	・ カウンセリングとアセスメント (二次被害の予防含む) ・ 専門機関へのリファー ・ 教職員のメンタルサポート	・ 学校組織機能回復のための マネジメント ・ 二次被害予防のための支援 計画策定	・ カウンセリング ・ アセスメント
派遣日数		・ 概ね１日～数日程度	・ 概ね１日～数日程度
備 考		・ ＳＣの勤務日は、 年間勤務日数には含まれない	・ ＳＣの勤務日は、 年間勤務日数に含まれる

***** SCと適切な協働をするためのチェックリスト *****

SCの専門性が発揮できるようための環境は整っていますか？

実際にチェックしてみましょう！

- ☐ SCの靴箱、SC専用の机が職員室に配置できている
- ☐ SCに年度当初に渡してほしい物一覧（P.8）を渡している
- ☐ 相談室の配置が適切になされ（P.9-10）、SC専用の机が配置できている
- ☐ 教職員の氏名をSCに渡し、SCを紹介した
- ☐ 教職員にSCの勤務日が周知されている
- ☐ SCに面接日等の勤務日の日程が分かるようになっている
- ☐ SCが授業中や休み時間など、子どもの様子を見ることができるようになっている
- ☐ 年度当初の広報を通して、子ども、及び保護者にSCを紹介した（P.7）
- ☐ SCが校内組織の一員として位置づけられ、管理職やSCコーディネーター、及び養護教諭との情報交換の時間確保ができている
- ☐ SCがSSWと情報交換できる環境や時間確保ができている
- ☐ 定期的に児童生徒や保護者に対し、SC活用の周知（P.10）ができている

各論Ⅱ SCの基本業務

(Ⅰ) 予防・未然防止／早期発見

① 児童生徒、学級、学校のアセスメント

ア 多角的な視点

個別面談、観察（授業中、休憩時間、給食や清掃活動、学校行事等）、Q U等のアンケート類、専門機関の診断や検査結果等から情報を収集し、個々の児童生徒、児童生徒間の関係、集団の状況、学校の状況等をbio-psycho-social（生物・心理・社会）の視点から多角的にアセスメントし、学校に対して適切に助言・援助を行います。

イ 留意点

SCは、アセスメントによって類型化やレッテル貼り、原因・犯人探しにならないように留意し、また自身のアセスメント結果に関連した情報のみを収集していないか確認することも必要です。心理アセスメントに加え、学校関係者や関係機関の様々な専門家による支援チームとしてのアセスメントも重視するとともに、アセスメントは経過を観察しながら必要に応じて修正していくことが重要です。

② 児童生徒、教職員とのラポール※形成

SCの紹介や通信発行のほか、教室巡回や行事への参加、心理教育の実施等で、児童生徒にSCの顔や名前、人となりを知ってもらう機会を設け、SCに相談しやすい環境を作る工夫が必要です。

また、授業者や子どもに配慮した授業参観や校内巡回を行い、実施後には教職員と主体的にコミュニケーションを取って情報共有をするなど、教職員との信頼関係を築き、SCが積極的に活用されるようにしましょう。

※ ラポール…互いに打ち解けて話ができる状態

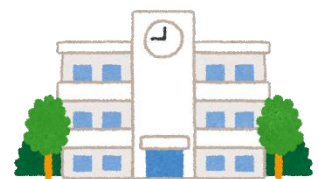
③ 校内での連携（情報共有）

勤務時には、管理職、担任、SCコーディネーター、養護教諭、SSW等との連携（報告、連絡、相談）を必ず行います。その中で学校のニーズを把握し、「チーム学校」の一員としてどのように参画し協働できるのかを、学校とともに確認しながら活動することが望ましいでしょう。

特に、福祉の専門職であるSSWとは、事例に応じてそれぞれの視点を持ち寄って複合的なアセスメントを行い役割を確認するなど、効果的な支援を行う上で、情報交換や協議のできる関係性を築いておくことが必要です。

また、児童生徒のカウンセリング等を行った場合にも、本人の了解を得た上で支援に必要な情報を教職員等と共有し、校内での支援方針を協議するなど、連携して支援を行うことが大切です。

なお、児童生徒が「秘密を守ってほしい」とSCに強調される場合は生命に関わるなどでない限り、本人らの意志も大切にしましょう。



★トピックス★ スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの視点と連携

学校で勤務していると、児童生徒や教員から「SCとSSWの違いって?」、「どのように役割分担したらいいの?」と尋ねられることがあるかもしれません。

スクールソーシャルワーカー(SSW)は、相談者の家庭・生活環境面の安定や改善のための支援を中心に行います。例えば、児童生徒の家庭への支援が必要な場合、SSWは保護者と面接を行い、家庭の状況に応じて、利用できそうな市町村の制度を探すなどの役割を担います。つまり、相談者の現実的な側面から、社会福祉等の専門的視点に基づいて支援を行うのが、SSWの役割となります。

SCがSSWと同じケースに関わる場合は、先生方は勿論、SSWとも情報共有や校内支援会で対応を確認することがとても大切になってきます。それぞれの専門性を活かして、多方面から相談者を支援していけるように、学校全体で連携していきます。

【担任・SC・SSWが連携した小学5年生Aさんの事例】

夏休み明けの2学期から、欠席が続いているAさん。担任の先生が家庭訪問を行った際、Aさんは「集団の中にいるのがしんどい」と打ち明けました。Aさんは、友人とのすれ違いから、人との付き合い方や距離感について悩み、集団に入ることへの抵抗やしんどい思いが強くなったようです。

Aさんの「今は教室に入るのがしんどい。別室登校をしてみたい」という思いを聞いた担任は、学校のSCコーディネーターの先生に相談。

その結果、Aさんの無理のない範囲で、

① 担任の定期的な家庭訪問や電話連絡

→ Aさんと保護者との繋がりを保つ。

② SCとAさんとの面接

→ Aさんのしんどさや困り感に寄り添い、心理的な負担の軽減や改善方法の検討。

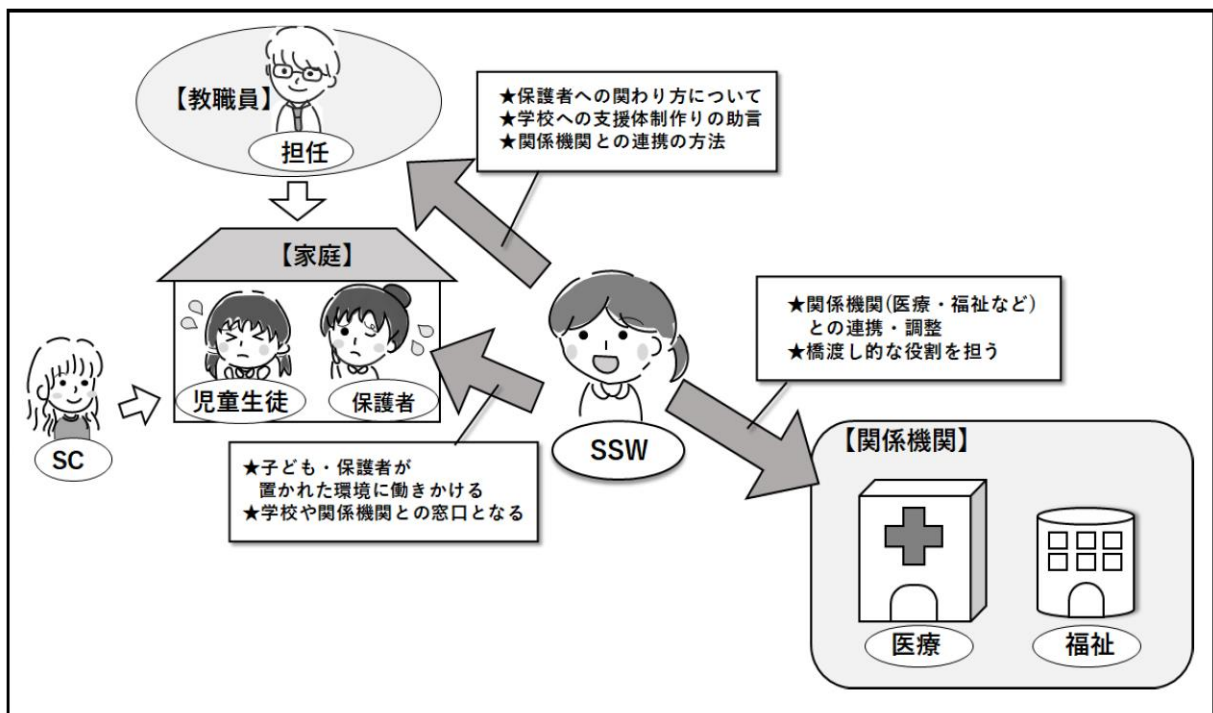
③ SSWとAさん・保護者を繋げていく

→ 教育支援センターをAさんと保護者に紹介。保護者の理解を得て、SSWとAさんと一緒に教育支援センターへ見学に行く等、Aさんが過ごしやすいような環境面の調整や橋渡しの役割を行う。

と学校で役割分担をし、Aさんへの支援を行うことにしました。Aさんの様子を見つつ、定期的に校内支援会を開いて、全体で情報共有や方向性の調整などを行っています。

表：SCとSSWの視点と役割

	スクールカウンセラー(SC)	スクールソーシャルワーカー(SSW)
目的	臨床心理的な視点から心のケア	社会福祉的な視点から環境の改善
手法	カウンセリング (心理面へのはたらきかけ)	ソーシャルワーク (環境面へのはたらきかけ)
役割例	<p>① 児童生徒等へのカウンセリングをとおり、気持ちの整理や現状改善を図る。</p> <p>② アセスメントに基づき、学校への支援方法などについて助言する。</p> <p>③ 教員へのコンサルテーションなど、児童生徒・保護者への間接的な支援。</p>	<p>① 児童生徒や保護者に寄り添いながら、面談や家庭訪問などにより困り感を把握し、支援策を検討する。</p> <p>② 家庭状況に応じた関係機関との連携や、保護者と学校や関係機関との橋渡し・窓口となるような役割を担う。</p> <p>③ 学校への支援体制づくりの助言など、児童生徒・保護者への間接的な支援。</p>



(図) SSWの役割・活動の一例

④ 関係機関との連携

学校だけでは対応できない事案は、学校外の関係機関と連携を行います。外部機関との連携は、学校組織として行うため、校長の判断が必要です。また、医療機関等の情報提供を行う際は、対象者が選択できるように複数の機関を提示します。S Cが情報提供書等を作成する場合も必ず校長の許可を得る必要があります。

学校によっては校長名連記で出す場合もあります。書式についてはS Cコーディネーターや管理職ともご相談ください。

<情報提供書の例>

年 月 日												
診療情報提供書												
<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="width: 60%;"> <p>医療法人〇〇会 〇〇病院 心療内科 医師 〇〇〇〇先生 御侍史</p> </div> <div style="width: 35%; text-align: right;"> <p>〇〇市立〇〇中学校 スクールカウンセラー 〇〇〇〇 〒〇〇〇-〇〇 〇〇市〇〇町〇丁目〇番地 T E L : 000-000-0000</p> </div> </div>												
<p>〇〇先生におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素よりお世話になっております。</p> <p>さて、この度 〇〇市立〇〇中学校 2年生 〇〇〇〇さん をご紹介させていただきます。</p> <p>ご多用のところ大変恐縮に存じますが、ご高診のほどよろしくお願いいたします。</p>												
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 40%; padding: 5px;">氏名</td> <td style="padding: 5px;">生年月日</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 5px;">住所</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 5px;">主訴</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 5px;">ご紹介目的</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 5px;">経過</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="padding: 5px;">学校で行っている対応や支援</td> </tr> </table>	氏名	生年月日	住所		主訴		ご紹介目的		経過		学校で行っている対応や支援	
氏名	生年月日											
住所												
主訴												
ご紹介目的												
経過												
学校で行っている対応や支援												

★トピックス★ スクールカウンセラーと心の教育センターとの連携と協働



心の教育センターは、高知県教育委員会の相談機関です。就学前から高校卒業頃までの年齢の児童生徒・その保護者を対象に、心の教育センター在籍SCが面接を行っています。国公立・私立、学籍の有無なども関係なく、対象年齢の児童生徒や保護者の方が利用することができます。

「心の教育センターってどういった施設なの?」、「何だか敷居が高そう」などといった、イメージや印象もあるかもしれませんが、SCが学校で児童生徒や保護者の方々に面接を行っているのと同じように、“心の教育センター”でも、在籍SCが面接を行っています。

連携・協働の具体例

児童生徒や保護者の相談先として、SCから心の教育センターを提案することができます。例えば、学校でSCが親子分離面接を検討している場合や、学校内での面接に抵抗が強い児童生徒の相談先を探している場合などが挙げられます。

また、SC自身が面接や支援会のことなど困った時の相談先として心の教育センターを利用することもひとつの選択肢です。

【SCが次の相談場所に繋ぐことができた高校1年生Bさんの事例】

Bさんは様々なことが重なり、担任の先生と何度も話し合った結果、高校退学を選択することになりました。また、Bさんは、SCの来校日にはいつも面接予約をして、SCに悩みや迷いを相談しています。

SCは、「Bさんの退学後は、学校内で自分に対応することは難しくなる。」と判断をします。そして、SCは面接の中でBさんの意思を丁寧に確認してから、Bさんの退学後の相談先として、心の教育センターを提案しました。

SCの対応後、Bさんの保護者は心の教育センターに問い合わせをし、現在Bさんは心の教育センターで相談することができているようです。

【SCの中立性を保つためにSCが判断を行った中学2年生Cさん・Dさんの事例】

SCはCさんの面接を継続的に行っています。Cさんは友人関係のトラブルから、不安やイライラが募るようになりました。SCとの面接の中で、その感情をSCに表出することもあり、不安定さが窺えます。SCは丁寧かつ慎重に、Cさんの面接を行っています。

ある勤務日、SCはCさんの担任の先生から『同じクラスのDさんの面接もお願いしたい。』と依頼されました。Dさんは、Cさんとトラブルになってしまった生徒です。担任の先生によると『DさんもCさんとの関係の中で気持ちが不安定になっているようなので、是非SCと繋がりたいです。』とのことでした。

SCは「Cさんとの面接をずっと継続してきた自分は、Dさんの考えや思いを中立的に対応していくのは、難しいだろう。」と判断をします。

担任の先生と相談を重ねた結果、SCはCさんの面接を継続し、Dさんの相談先として心の教育センターを検討してみることにしました。



⑤ 教職員への研修

日常的に児童生徒と接する教職員が、カウンセリングの基礎知識やスキルを習得し、児童生徒が遭遇する可能性のある種々の問題への理解を深め、対処方法についてSCと共通理解を図ることなど、教職員の教育相談の力量向上を援助することが目的です。

実施形態として、

- 1) 情報伝達型 2) 参加型 3) 事例検討型

があり、内容に応じてこれらの方法を組み合わせて行います。

★トピックス★ スクールカウンセラーが実施する校内研修

(1) 依頼の多い研修内容

よくあるテーマとして、「不登校」や「発達障害」、「ストレス」や「アンガーマネジメント」などが挙げられます。

(2) 校内研修の資料作り

校内研修を依頼された場合、SCはSCコーディネーターなどの関係教員と内容の打ち合わせを行います。どんな内容が適切か、誰を対象に行うのかということを踏まえた上で資料作りにとりかかります。他のSCの資料を参考にさせてもらうこともあります。

また、心理教育の一環として、SC側から研修を提案することもあります。その場合でも内容の打ち合わせを行い、その学校に即したテーマを選ぶ必要があると考えられます。さらに、発表形式にも工夫が必要で、特に長時間に渡る場合、講義形式だけでなくエクササイズやグループワークを取り入れることで、より実りのある研修会になるなど、会場設定も含め十分な打ち合わせが大切です。

(3) 資料の印刷・配付

研修資料が完成したら起案を行い、事前に管理職や担当の教職員に内容の確認を求めます。修正箇所を直した後に印刷作業に入ります。研修の中で事例を扱う場合には匿名であっても終了後SCが確実に回収し、責任を持って処分をします。

依頼を受けた研修の実施についてお困りの際は、人権教育・児童生徒課または心の教育センターにご相談ください。

心の教育センターにある参考文献や資料の貸出、また、在籍SC・指導主事が一緒に考えさせていただくこともできます。ぜひお声かけください。



⑥ 児童生徒への心理教育

学校の計画に基づき、全ての児童生徒が安心した学校生活を送れる環境づくりの一環として、児童生徒の実態に応じたプログラムの実施や、教職員への助言・援助を行います。

《心理教育の例》

- ・ 「高知家」いじめ予防プログラム
- ・ ストレスマネジメント
- ・ ソーシャルスキルトレーニング
- ・ SOSの出し方に関する教育
- ・ ピア・サポート活動
- ・ アンガーマネジメント など

(2) 対応

① 児童生徒、学級、学校のアセスメント〈再掲PI4〉

② 児童生徒のカウンセリング

ア 来室経路

児童生徒からの直接的な申し出のほか、保護者や教職員からの依頼等により、SCのもとへ来室する場合があります。

イ アセスメントのための情報収集

事前に、対象の児童生徒について、出席状況や学習への取組み、保健室の利用や保護者の状況等について、可能な範囲で担任等関係教職員からの情報収集を行います。また、教職員の許可を得て授業を参観したり、休み時間や行事等の場面に出席したりして、児童生徒と関係を築きながら、日常の様子を捉えることも大切になります。

ウ 実施時の留意点

実施にあたっては、対象の児童生徒が安心できるように、部屋や時間を予め設定します。緊急事態等が発生しない限り、基本的には最初の設定(枠組)を変更しないようにします。そうすることで、児童生徒が心理的安全を感じ、SCとの信頼関係を構築しやすくなります。

初回面接では、来談したことを労った上で児童生徒の話を丁寧に聴き、信頼関係の構築に努めるとともに、事前情報と併せて当面の支援目標を立て、児童生徒と共有することが基本となります。そして、守秘義務について説明し、その中で必要に応じて教職員と情報を共有する可能性があることを伝え、本人の了解を得るように努めます。

また、本人がカウンセリングを希望していても、保護者の了解が得られない場合があります。児童生徒へのカウンセリングは、結果的に児童生徒が困難な立場に置かれずに、保護者のカウンセリングに対する思いや家庭の状況等も踏まえ、実施するよう心がけましょう。

エ 継続的な支援

児童生徒の学校や家庭での状況、カウンセリングの様子を基に、随時アセスメントを行い、支援目標の見直しを行いながら支援を継続します。

オ 来室以外のカウンセリング

児童生徒の状況によっては、家庭訪問やICTを活用したカウンセリングの実施も考えられます。児童生徒が選択できるように、多様な支援方法を整えておくことが望ましいです。実施にあたっては、必ず教職員とSCで学校の方針を確認しましょう。

★トピックス★ カウンセリングにおけるスクールカウンセラーの視点

一般的に“カウンセリング”とは、心理職者が相談者の思いや考えに寄り添い、臨床心理学的な視点からアプローチを行っていきます。相談者への助言を行う場合もありますが、何より大切なのは、相談者の自分の気持ちの整理や自分の力で進んでいくためのお手伝いをしていくという視点です。

SCへの相談には、児童生徒、保護者、教職員など、さまざまな相談者が訪れます。その内容としては、友人関係や学業、家族関係についての相談から、命に関わるような緊急性の高い相談まで幅広くあります。SCとして、どのような相談においても、まずは相談者の気持ちや感情に寄り添っていく姿勢となります。SCは、決して指示的にはならないように、相談者の思いや考えをしっかりと聴き、一緒に状況を整理したり、目標を立てたりといった作業を丁寧に行い、相談者の気持ちの安定や困っていることなどの改善に繋がるためのアプローチをしていきます。

一方で、緊急性の高い相談内容などは、SC自身に「早く何とかしなければ」という強い焦りが生じる場合も考えられます。そんな時こそ、SCは置かれた状況や周囲の感情に巻き込まれないように、冷静な視点から物事を全体的に捉えていく力も非常に大切となるのです。

③ 保護者への助言・援助

ア 来室経路

保護者自ら希望する場合と、教職員や関係機関等の勧めで、来室する場合があります。

イ チーム学校の一員として

保護者は児童生徒の重要な支援者の一人です。チームとしての支援が有効に進むように、共に考えていきましょう。その際、学校（教員）と保護者双方の考えや感情を理解し、保護者への対応が児童生徒の支援となるように、両者をつなぐ姿勢で助言・援助を行います。

ウ 来室以外での援助・助言

SCの勤務時間に来室できない事情がある場合は、電話やICTを活用する方法もあります。実施にあたっては、教職員とSCで学校の方針を確認しましょう。

また、教職員へのコンサルテーションによって、間接的に援助することも重要です。

★トピックス★ オンラインカウンセリング

(1) オンラインカウンセリングとは

電話・電子メール・SNS・各種Web会議サービス等を利用することにより、遠方の方や外出困難な方を含め、相談に応じることができるようになります。映像や音声、文字のやりとりを通して関わるため、対面で話をすることに不安や苦手意識のある相談者でも利用しやすい場合があります。

(2) 実施上の留意点

通常の対面式カウンセリングの留意点に加え、オンラインカウンセリングならではの配慮が必要だと考えられます。



① 環境面

相談者の方がどのような状況でその場に臨んでいるかも考慮します。周りに会話の内容や画像が漏れない環境かも配慮しつつ活用することが求められます。また、インターネット通信ができる媒体と、各種サービスを利用できるアカウントを持っている必要があります。

② 通信機器による影響

ビデオ通話の場合でも、スクリーン上にカメラがないため相手と目を合わせて話すことが難しい、非言語的なメッセージが伝わりにくい、音声や映像が遅延したり途切れたりする可能性がある等、対面式にはない影響が見られるかもしれません。

③ 機密性

やりとりが通信媒体を通して行われるため、内容の録画・録音・画像保存が容易に行えると考えられます。事前に面接内容の保存や共有は禁止する旨を伝えた上で、カウンセラー側も面接内容に配慮を要すると考えられます。

④ その他

カウンセリング中に相談者が一方的に通信を遮断した場合（マイクのミュート、映像の停止等）や、自傷他害が起きた場合などを想定し、事前に対応を考えておく必要があります。

④ 教員へのコンサルテーション

ア 対等な関係

教員は教育の専門家です。SCは、教員の考え方やこれまでの経験を尊重し、対等な関係で意見交換を行うことが求められています。

イ ニーズの把握

まずSCは、教員が困っていることや求めていることを、話を聴きながら明確にすることから始めます。

ウ 教員の意見を交えた支援方針の検討・決定

新たな関わり方や工夫、新しい理解、支援チームメンバーの選定や役割など、学校生活の中で児童生徒と多くの時間を過ごしている教員の思いや考えも尊重しながら、SC及び教員双方の意見を踏まえて検討・決定していくことが重要です。

★トピックス★ コンサルテーションとは

(1) コンサルティとコンサルタント

コンサルテーションとは、コンサルティ（ここでは教員）に対しコンサルタント（ここではSC）が課題解決のための支援を行うことです。コンサルティも他領域（ここでは教育）の専門家であり、互いの専門性を尊重することが大切です。そのため、コンサルタントはコンサルティの教育者としての専門性を生かすサポートをするという姿勢が求められます。

(2) コンサルテーションについて

コンサルテーションの内容はコンサルティが受け持つ児童生徒や保護者への対応についてのもが多いと考えられます。コンサルティと児童生徒・保護者との関わりは1回きりではなく日々続いていくものなので、現在の関わりのままでよいか、変えようとしたらどこを変えたらよいかをできる範囲で共に考えていくことが重要です。また、SCが担当するケースと同様にコンサルテーションのケースに関しても経過に関心を持つことが必要です。

⑤ 校内での連携(情報共有)〈再掲P14〉

⑥ 校内支援会への参加

ア SCの役割の確認

学校によって校内支援会の回数や開催方法、構成メンバーは異なります。校内支援会におけるSCの役割等については、年度当初に管理職やSCコーディネーターと確認をしておきましょう。

イ 個別支援の検討

SCは、個別支援が必要な児童生徒に対して、関わりのある教職員を中心に、情報共有を行います。それを踏まえ、教職員やSSWと共に必要な支援について話し合いをします。SCも心理アセスメントをもとに、児童生徒にとって有益な支援についての意見を出します。その上で、他のメンバーとともに支援方針や方法を決定していきます。

支援を検討する予定の児童生徒が分かっている場合は、あらかじめ教室等で児童生徒の様子を観察し、アセスメントのための情報を収集するとよいでしょう。



ウ 集団支援の検討

学級や学年など、集団への支援を検討するために校内支援会が開催されることもあります。この場合も、児童生徒個人だけでなく、事前に学級や学年の様子を観察し、集団の状況についてもアセスメントができるようにしておくとうまくいくでしょう。

エ 校内支援会に参加出来ない場合

勤務の都合で校内支援会に参加できない場合には、事前に支援を検討する児童生徒や集団についての情報やアセスメント内容を、SCコーディネーターや支援メンバーに伝えておく方法があります。次回の勤務時に、校内支援会の内容や支援方針等について申し送りを受けることで、支援メンバーの一員として役割を果たしていくことができます。

★トピックス★ 校内支援会とは？

校内支援会とは、児童生徒の支援に関わる人が集まって「いつ、誰が、どのような支援をできるか」を決める場所です。校内支援会では、はじめに情報共有を行い、それをもとに参加者全員でアセスメントを行い、支援方針や具体的な支援内容を考えていきます。

支援方針や具体的な支援内容は、児童生徒の状況に応じ、修正していくものなので、前回決めてやってみた支援はどうだったか、今後、どのようなことが考えられるかを振り返る必要があります。そのためにも、校内支援会は定期的に関開くことが望ましいです。また、必要に応じて保護者や外部機関等を招いて会をもつのもよいかもしれません。

SCは、専門的な知見を生かした見立てを行うとともに、当事者から少し離れているからこそ見える、できている点や強みにも注目しながら助言を行います。

校内支援会を行う際は、時間が長くなり、参加者の負担にならないよう配慮する必要があります。そのため、一回の校内支援会で検討する人数や内容をあらかじめ決めておくことも必要です。また、支援者の日頃の苦労をねぎらい、今できていることを確認するのも目的の一つです。

⑦ スーパーバイズ

高知県では、スーパーバイズ制度を設けており、個別面接型、集団型、学校活動型※のスーパーバイズを、ニーズに合わせて選べるようになっています。

採用3年目までのSCは年間4回以上のスーパーバイズを受けることを義務づけていますが、3年目以降も自身の知識やスキルを高め、専門性の向上を図る機会として、積極的に活用するようにしましょう。

※ 学校活動型スーパーバイズ … スーパーバイザーがSCの勤務している学校と一緒に勤務し、SCの活動に沿って助言・援助を行う

★トピックス★ スクールカウンセラーの勤務例(1日の流れ)

時間	9:00～17:00勤務の場合
9:00	出勤。情報共有を行い、相談室の準備をする
⋮	
10:00	情報共有をもとに授業観察
⋮	
11:00	子どもと面接 
⋮	
12:00	昼休憩
⋮	
13:00	昼休みに子どもたちと関わる
⋮	
14:00	保護者と面接
⋮	
15:00	記録の作成 
⋮	
16:00	校内支援会に参加する
⋮	
17:00	相談室の片付けをし、退勤

SCは出勤後、児童生徒の状況について、変化がなかったか等、関係教員と情報共有を行います。その後、当日の面接予定の確認、相談室の準備もしておきます。

授業が始まってからは、予約状況に応じて面談をしたり、教室に行き、授業参観を行ったりします。また、長休みや昼休みには子どもたちと関わり、授業とは違った子どもたちの様子を観察したり、教員と情報共有をしたりします。加えて、空いた時間に記録を書いたりすることもあります。

勤務終了前は、管理職への報告や関係教員等と情報共有を行い、退勤します。

これはあくまで一例です。SCは、勤務校の状況に応じた活動方法を見つけ、効果的な活動となるよう工夫が必要です。

★トピックス★ 校種等による勤務の留意点

勤務する校種等によって、SCに求められる活動内容は異なります。

例えば、小学校では言語面接よりも休み時間や授業参観等を通じた観察や関わりが活動の中心になってくるでしょう。一方、中学校や高校では生徒への言語面接を中心に支援していくが必要になってくることも多くなるでしょう。

また、小学校と中学校が同じ敷地内にある学校、定時制や通信制など多部制の高校などで勤務するとなると、SCに求められる活動内容や役割は多岐に渡ります。

まず、SCはそれぞれの勤務校がSCに求めている活動内容や役割の把握に努めるとともに、各学校の校風などを理解していくことが大切になります。

そして、SCコーディネーター等との関わりはもちろん、学校の配布物などを通して、学校の様子を知ることにより良い活動にするための大きなヒントとなります。



(3) 緊急対応

事故や事件、自然災害等による児童生徒や教職員の命にかかわる事案や、教職員の不祥事など、学校コミュニティに危機をもたらす出来事が発生したときに、緊急学校支援チームが派遣される場合があります（P 参照）。その際、当該学校のSCは、緊急学校支援チームの一員として、教職員とともに児童生徒のこころのケアに努めます。

当該学校のSCは、一般的に下記のような支援活動を行います。

- ・ 日頃から支援を要する児童生徒をリストアップし、支援の際の留意点等を教職員に伝える。
- ・ こころの健康調査結果をチェックし、ハイリスクな児童生徒をピックアップする。
- ・ 校内観察や教職員からの情報を通し、ハイリスクな児童生徒の状況を把握する。
- ・ ハイリスクな児童生徒へのカウンセリングを実施する。
- ・ 校内観察やカウンセリング結果を緊急学校支援チームに報告し、今後の支援体制について検討・提案する。
- ・ 希望する教職員のカウンセリングを実施する。
- ・ 全校集会や保護者会等で、児童生徒や保護者へこころのケアについて話をする。

当該学校のSCは、緊急学校支援チームの派遣が終了した後も、通常のSC活動と並行して事案の影響をアセスメントし、児童生徒や教職員の支援を続けます。必要に応じてスーパーバイザーの助言も受けることができます。

★トピックス★ 災害発生時のスクールカウンセラーの勤務体制

SCが学校や教育支援センターに勤務している時に災害が発生した場合は、まずはSC自身の安全を確保します。その後は児童生徒の生命を守るための援助を行うなど、学校長や所属長の指示に従い活動します。児童生徒に対する心のケア活動については、県内の被災状況をふまえ、県教育委員会や市町村教育委員会、関係団体等が連携して計画を策定する予定です。その計画をもとにSCも活動を行っていきます。SCの安否確認や情報伝達手段として「高知県防災アプリ」への登録をお願いしています。

参考資料

- * 高知県教育委員会学校教育課 H15. 3
高知県スクールカウンセラーガイドブック
- * 一般社団法人日本臨床心理士会 R4. 3
文部科学省令和 3 年度いじめ対策・不登校支援等推進事業報告書
スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの常勤化に向けた調査研究
- * 文部科学省 H29. 1
児童生徒の教育相談の充実について 学校の教育力を高める組織的な教育相談体制づくり
- * 高知県教育委員会人権教育課 H29. 3
児童生徒支援の組織的な対応のために一校内支援会の充実に向けてー
- * 高知県教育委員会人権教育・児童生徒課 R5. 4
スクールカウンセラー等派遣要項
スーパーバイザー設置要項
- * 高知県教育委員会人権教育課 H25. 6
児童生徒の生命に関わる事件・事故後の対応（改訂）
児童生徒の生命に関わる事件・事故後の対応【事例編】
- * 高知県教育委員会人権教育・児童生徒課 R4. 4
スクールカウンセラー等配置のための留意点
- * 一般社団法人日本臨床心理士会
オンラインによる遠隔でのカウンセリングにおける留意点
- * 日本学生相談学会 R2. 9
遠隔相談に関するガイドライン ver. 01
- * 公認心理師法
- * 一般社団法人日本臨床心理士会
臨床心理士倫理綱領

監 修

高知県スクールカウンセラースーパーバイザー

執筆・編集

高知県教育委員会 人権教育・児童生徒課
高知県心の教育センター

発 行

高知県教育委員会 人権教育・児童生徒課